

近世代官所町の歴史地理学的考察

南 波 純

一 はじめに

代官の官舎である本陣、公用を執務する役所、米蔵、運上蔵、属吏の官舎である小屋または長屋、牢屋を総称して代官所、もしくは代官陣屋とよぶ。

藩政時代の政治中心地のうち、城下町については数多くの研究がなされているが、代官所所在地に関する研究は極めて少なかったといえよう。

そもそも歴史学においても、藩領と比べ天領についての研究の立遅れが指摘され、村上直による一連の業績は、高く評価すべきであろう⁽¹⁾。しかしながら、歴史からのアプローチがあくまでも郡代、代官を中心とする江戸幕府の地方支配機構や制度的側面が中心であって、地理学的な面からの検討は極めて稀薄であったことは否定できないであろう。

このような状況にかんがみ、とくに天領の代官所が設置されていた都市について、歴史地理学的立場から研究をす

表1 代官所町の概要

| 代官所 ⁽¹⁾ | 現在地名 | 支配地 ⁽²⁾ | 支配高 ⁽³⁾ (万石) | 設置時期 ⁽⁴⁾ | 人口 ⁽⁵⁾ (明治12年) | 明治初期の県 庁の有無 ⁽⁶⁾ | 跡地の利用 ⁽⁷⁾ | 現在人口 ⁽⁸⁾ | 備考 |
|--------------------|---------|--------------------|----------------------------|---------------------|------------------------------|-------------------------------|----------------------|---------------------|-----------|
| 1 柴橋 | 山形県寒河江市 | 出羽 | 6.9 | 宝暦10 | | | | 41,603 | (寒河江市の人口) |
| 2 桑折 | 福島県桑折町 | 陸奥 | 8.3 | 天和2 | 2,774 | | 郡役所→地方事務所 | 4,856 | |
| 3 塙 | 〃 塙町 | 陸奥・常陸 | 5.7 | 享保14 | 506 | | | 12,328 | |
| 4 小名浜 | 〃 いわき市 | 陸奥 | 8.3 | 延享4 | 3,853 | | | 347,210 | (いわき市の人口) |
| 5 真岡 | 栃木県真岡市 | 下野 | 9.4 | 天明3 | 2,794 | 真岡県 | 小学校 | 53,664 | |
| 6 岩鼻 | 群馬県高崎市 | 上野・武蔵 | 13.4 | 寛政5 | 818 | 岩鼻県 | 県庁→官舎 →社宅 | 223,069 | (高崎市の人口) |
| 7 水原 | 新潟県水原町 | 越後 | 10.6 | 延享3 | 6,814 | 水原県 | 小学校→公民館 | 20,036 | |
| 8 出雲崎 | 〃 出雲崎町 | 越後 | 7.1 | 元和2 | 9,060 | | 空地 | 7,173 | |
| 9 中野 | 長野県中野市 | 信濃 | 5.4 | 元禄16 | 3,050 | 中野県 | 県庁→公民館 | 40,149 | |
| 10 甲府 | 山梨県甲府市 | 甲斐 | 8.4 | 享保9以降 | 18,394 | ●甲府県→山梨県 | 小学校 | 199,333 | |
| 11 市川 | 〃 市川大門町 | 甲斐 | 7.9 | 明和2 | 4,681 | 市川県 | 一般市街地 | 13,170 | |
| 12 石和 | 〃 石和町 | 甲斐 | 5.7 | 享保9以降 | | 石和県 | 小学校 | 17,154 | |
| 13 葦山 | 静岡県葦山町 | 武蔵・相模・駿河・伊豆 | 8.4 | 天正18 | 1,497 | 葦山県 | 邸宅(現存) | 15,787 | |
| 14 駿府 | 〃 静岡市 | 駿河・遠江 | 8.0 | 寛永9 | 36,921 | ●静岡県 | 一般市街地 | 457,464 | |
| 15 中泉 | 〃 磐田市 | 遠江・三河 | 6.3 | 天正18 | 1,950 | | 寺院 | 76,901 | (磐田市の人口) |
| 16 笠松 | 岐阜県笠松町 | 美濃・伊勢 | 10.0 | 寛文2 | 3,550 | 笠松県 | 県庁→一般市街地 | 22,766 | |
| 17 高山 | 〃 高山市 | 飛騨・越前・加賀 | 11.4 | 元禄5 | 14,254 | 高山県 | 現存 | 62,979 | |
| 18 大津 | 滋賀県大津市 | 大和・近江 | 10.1 | 元和3 | 18,099 | ●大津県→滋賀県 | 一般市街地 | 214,099 | |
| 19 信楽 | 〃 信楽町 | 近江・山城・河内 | 5.5 | 慶長5 | | | | 13,633 | |
| 20 五条 | 奈良県五条市 | 大和 | 6.1 | 寛政7 | 4,099 | 五条県 | 県庁→史跡公園 | 34,913 | |

| | | | | | | | | | | |
|----|-----|---------|----------------------|------|------|---------|------|------------|---------|----------|
| 21 | 久美浜 | 京都府久美浜町 | 丹後・但馬 | 6.7 | 享保16 | 1,917 | 久美浜県 | 小学校 | 13,425 | (大田市の人口) |
| 22 | 生野 | 兵庫県生野町 | 但馬・播磨・美作 | 7.4 | 慶長5 | 3,614 | 生野県 | 小学校 | 6,225 | |
| 23 | 大森 | 鳥根県大田市 | 石見・備後・備中 | 7.8 | 慶長6 | 2,173* | 大森県 | 県庁→郡役所→資料館 | 38,612 | |
| 24 | 倉敷 | 岡山県倉敷市 | 備中・讃岐・美作 | 6.3 | 寛永19 | 6,061 | 倉敷県 | 記念館 | 407,580 | |
| 25 | 日田 | 大分県日田市 | 豊前・豊後・日向 肥前・肥後・筑前 | 11.7 | 寛永16 | 3,831** | 日田県 | 一般市街地 | 65,410 | |
| 26 | 長崎 | 長崎県長崎市 | 肥前 | 3.6 | 天正16 | 32,876 | ●長崎県 | | 444,317 | |

〔注〕

(1) 村上直・荒川秀俊「江戸幕府代官史料県令集覧」による。慶応3年に元陣屋であったもの。(2) 前掲(1)。(3) 天保10年の石高, 前掲(1)。(4) 村上直『天領』による。(5) 参謀本部編『共武政表(明治12年版)』。(6) ●は現在も県庁所在地。(7) →は利用の変動をあらわす。(8) 「全国市町村要覧(昭和56年版)」による。*大森町と銀山町の合計。**豆田町と隈町の合計。

すめている筆者は、まず村上の研究(2)を礎に、とくに地理学的な面について諸文献の記述を整理し、一部地域については実地調査の結果を加えて基礎資料を作製した(表1・図1)。この検討が今回の主な報告内容である。今回取り上げた二六ヶ所は、慶応三年(一八六七)時に、現在でいう「本庁」にあたる元陣屋として設置されていたものであって、支庁や出張所にあたる出張陣屋については、今後に譲ることにした。また三都(江戸・京都・大坂)所在のものについても性格を異にするので、取り上げていない。

本稿は以上のことから代官所所在地について若干の考察を行なったものであり、諸先学の御批判をいただければ幸いである。

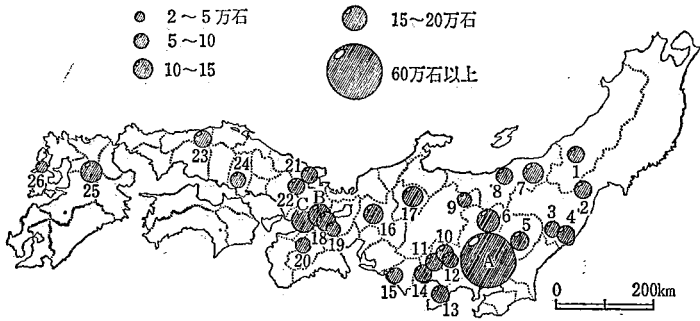


図1 代官所の分布の石高
 A：江戸在府，B：京都，C：大坂，1～26は表1参照。

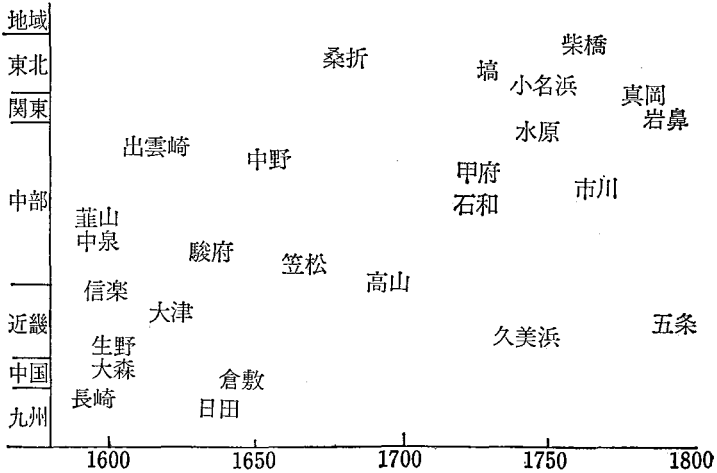


図2 代官所の設置時期にみる地域的分布

二 代官所の分布と設置時期

置時期

天領の分布については、村上による先駆的な研究があり⁽³⁾、これによれば関東筋、海道筋、畿内筋、そして北国筋の順に集中している。当然代官所もこれらの分布にともない設定されているのであるが、陸奥における小名浜と塙、甲斐における甲府・石和・市川などのように比較的至近な距離に設定しているものもあり、今後その設定の地理学的意義について検

表 2 代官所町の職業構成

〔単位：軒。()内は%〕

| 笠松 (明治4年) | | 中野 (明治11年) | | 日田 (豆田町) (元文4年) | |
|-----------|------------|-------------|------------|-----------------|---------------|
| 農業 | 127 (14.4) | 農業 | 265 (31.3) | 農業 | 50〔33〕(16.5) |
| 手工業 | 148 (20.8) | 手工業 | 106 (12.5) | 手工業 | 63〔53〕(20.8) |
| 商業 | 382 (43.3) | 商業 | 367 (43.3) | 商業 | 122〔96〕(40.3) |
| 日雇 | 171 (19.3) | 雑業 | 83 (9.8) | 手間賃稼 | 57〔28〕(18.8) |
| 寺院 | 7 | 社寺 | 19 | その他 | 11〔10〕(3.6) |
| 医術 | 4 | 医業 | 6 | 計 | 303〔220〕(100) |
| 士族 | 3 | 寄留 | 2 | | |
| 筆道教授 | 2 | 計 | 848 (100) | 〔 〕の数字は主業者数 | |
| その他 | 3 | | | 〔大分の歴史〕P.363 | |
| 計 | 883 (100) | 工・商は農業兼業を含む | | (5巻), 原田敏丸氏に | |
| | | 〔中野市史〕より作成〕 | | よるものに加筆し作成〕 | |

〔笠松町史〕より作成〕

討をする必要があると思われる。

さらに、その設置時期についてみると(表1)、天正一六年(一五八八)の長崎から、寛政七年(一七九五)の五条に至るまでおよそ二〇〇年のひらきがあり、これが代官所町の一つの特徴といえるのではないだろうか。とくに西日本および北海道に設置された代官所が、江戸初期に集中しているのに対し、東日本の多くが享保以降に設置されていることに注目したい。

三 代官所町の職業構成

代官所町の職業構成については、笠松(美濃)・中野(信濃)・日田(豆田町)√(豊後)について資料を得ることができたので検討を加えてみたい(表2)。このうち笠松・中野は明治初期のもの、日田については江戸期のものである。

笠松は岐阜市の南に位置し、木曾川の右岸に沿って帯状にひらけた平坦地である。木曾川の水運を利用し、古くから美濃の物資の集散地であった。この地に代官所が設置されたの

は、寛文二年（一六六二）で、以来約二〇〇年、美濃郡代笠松陣屋の所在地として、政治経済の中心地として栄えていた。

笠松の職業構成をみると、実に八五％が商工業をはじめとする第二次・第三次産業に従事しており、都市としての性格が極めて強かったことがうかがわれる。また笠松については士族数の記述が見られるが、これについては代官所が設置されていた時期の士族数を反映しているか否かは判断し難い。

中野は、長野県北部、長野盆地東麓の中野扇状地の扇央に位置している。この地に代官所が置かれたのは、元禄一六年（一七〇三）であるが、それ以前から九苜市などが開かれ、市場町としても栄えていた。

中野の職業構成を見ると、六八・七％が第二次・第三次産業に従事していたのであるが、この中には農業兼業を多く含んでおり、前述の笠松に比べ都市的性格はやや劣っていたといえよう。

日田は、三隈川・花月川・玖珠川・大山川の合流点にあり、日田盆地の中心地として交通上の要衝でもあった。この地に代官所が置かれたのは、寛永一六年（一六三九）であり、明和四年（一七六七）に、西国筋郡代に昇格してから九州天領の中核となった。代官・郡代の支配高は多い時でも一六万七〇〇〇石で、全国天領の四％にすぎなかったが、辺要の地九州における幕府権力を代表し、周辺外様大名監察の任をおびていた。加えて経済上では「日田金」、思想文化上では咸宜園などで代表される極めて特色ある地位を占めていた⁴⁾。

日田は豆田町と隈町から成るが、豆田町には多くの商家が集まり町人としての性格が強かった。職業構成からそのことがうかがわれ、実に八三・五％が第一次・第三次産業に従事しており、このうちの主業者の比率も高い。

以上のように、笠松・中野・日田の三者から都市機能についてみると、三者に共通して商工業に従事するものの比

代官所町の景観の特色として、まず第一に挙げられることは、城下町のような身分階層による居住地区分が見受けられないということである。表5にみられるような代官所の役人の数は極めて少なく、武家だけの居住地を形成するに至らなかった。まして武士の間における職業的・階層的居住地区分が見られるはずはなかった。このことは、所によっては武士と庶民の混住という形態を生み、むしろそのことが高山や倉敷に代表される高度な町人文化を生んだといえるのではないだろうか。

率が高く、当時としては都市としての性格が強かったことがうかがわれる。

四 都市景観の特色

表 3 代官所町人口の他都市との比較および寺院数

| 順 | 位 | 都市名 | 人 口 | 寺院数 |
|-------|----|-----|--------|-----|
| 新 潟 県 | 1 | 新潟 | 37,076 | 49 |
| | 2 | 高田 | 22,190 | 137 |
| | 3 | 三条 | 13,057 | 19 |
| | 4 | 長岡 | 11,797 | 35 |
| | 5 | 雲上 | 10,807 | 8 |
| | 6 | 新発田 | 9,060 | 27 |
| | 7 | 出雲 | 8,386 | 8 |
| | 8 | 加茂 | 7,554 | 1 |
| | 9 | 村松 | 7,426 | 25 |
| | 10 | 小千谷 | 7,149 | 10 |
| | 11 | 水原 | 6,814 | 9 |
| 岐 阜 県 | 1 | 大垣 | 18,281 | 39 |
| | 2 | 岐阜 | 14,254 | 27 |
| | 3 | 八加 | 12,960 | 54 |
| | 4 | 加納 | 5,597 | 9 |
| | 5 | 関 | 4,962 | 16 |
| | 6 | 関 | 4,426 | 18 |
| | 7 | 細川 | 4,391 | 7 |
| | 8 | 古竹 | 4,036 | 5 |
| | 9 | 竹ヶ有 | 3,721 | 7 |
| | 10 | 上ケ有 | 3,698 | 5 |
| | 11 | 上鶴 | 3,630 | 5 |
| | 12 | 笠松 | 3,550 | 8 |
| 長 野 県 | 1 | 松本 | 14,502 | 12 |
| | 2 | 上田 | 12,548 | 16 |
| | 3 | 飯山 | 9,873 | 20 |
| | 4 | 松本 | 9,363 | 22 |
| | 5 | 長野 | 8,330 | 48 |
| | 6 | 小川 | 7,007 | 13 |
| | 7 | 小川 | 3,114 | 7 |
| | 8 | 中野 | 3,050 | 10 |
| 山 梨 県 | 1 | 甲府 | 18,394 | 26 |
| | 2 | 市川 | 4,681 | 18 |
| | 3 | 鵜谷 | 4,041 | 8 |
| | 4 | 谷村 | 2,590 | 12 |

〔人口、寺院数とも「共武政表（明治12年）」より作成〕

また都市計画において、代官による軍事的配慮という点も稀薄であったと思われる。例えば、城下町にみられる遠見遮断の鍵形の道路はほとんど見ることができない。このことは都市計画のみならず、町の軍事力・警察力という点にも指摘することができ、武士団の力が弱く、警察権の弱さから博徒や親分衆の活躍を生んだ地でもあった(5)。

ただ軍事的配慮という点については、高山をはじめ、中世・近世初期の城下町の町並みをそのまま踏襲しているものにおいては、その影響を指摘し得ることは当然のことであろう。

また現地調査によって、市川・水原・笠松の三者に共通して、幅およそ一〜二メートルの路地が網の目のように町の中に存在することが確認された。これらの路地は、共通して水路を伴っており、こうした路地がどのような意味をもつか、今後他の都市についても調査し検討する必要があると思われる。

その他、代官所町全体に共通することとして寺院が多いことを挙げたい(表3)。例えば新潟県について見ると、出雲崎は人口で第六位であるが寺院数では三位の三条、五位の新発田をしのいでいるほか、水原も寺院数では、人口で上位である新発田・加茂・村松を上回る。また岐阜県についてみると笠松は人口では一二位であるが、寺院数では七位となる。山梨県では甲府の一位は当然のこととして、市川は人口においてほぼ同規模の鰍沢と比較し、倍以上の寺院数となっている。

このこと並びに寺院の配置についても計画的なものであるのか、城下町のように軍事的な意味をもつものであるのかについての検討を加える必要があると思われる。

五 人口と石高の関係

都市人口と支配領域石高の関係については、これまで城下町について藤岡謙二郎(6)、矢守一彦(7)、西村睦男(8)ら

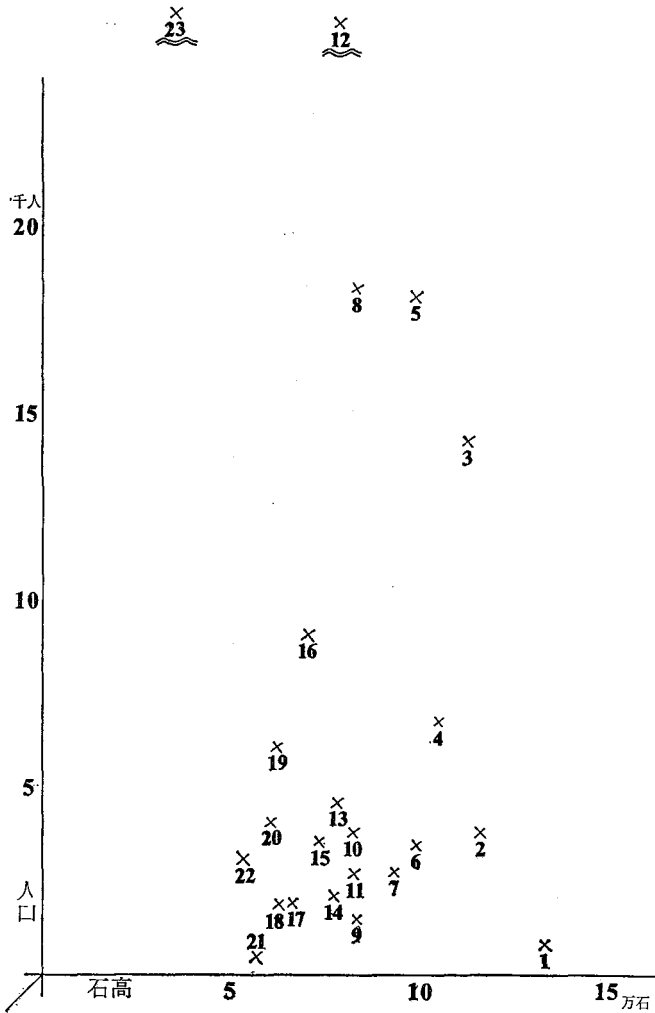


図 3 代官所町の人口と石高の関係

- 1岩鼻, 2日田, 3高山, 4水原, 5大津, 6笠松,
 7真岡, 8甲府, 9蕪山, 10小名浜, 11桑折, 12駿府,
 13市川, 14大森, 15生野, 16出雲崎, 17久美浜,
 18中泉, 19倉敷, 20五条, 21埴, 22中野, 23長崎

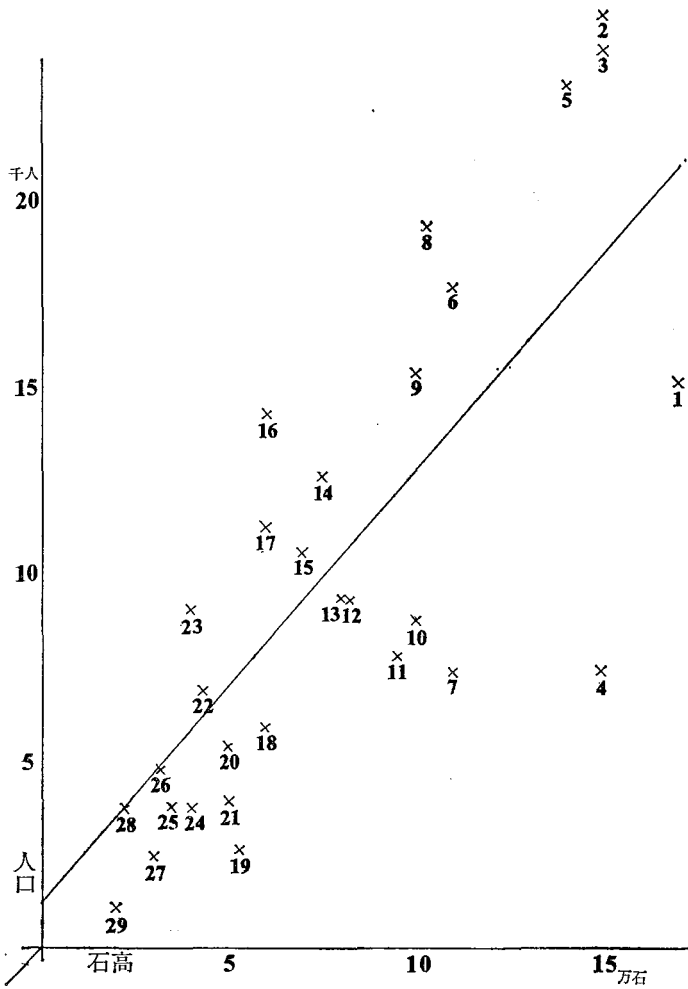


図 4 城下町の人口と石高の関係

1 前橋, 2 高田, 3 姫路, 4 小倉, 5 鶴岡, 6 福山, 7 白河
 8 小浜, 9 宇和島, 10 松代, 11 土浦, 12 川越, 13 古河, 14 小
 田原, 15 豊橋, 16 松本, 17 浜松, 18 篠山, 19 上田, 20 二本松
 21 掛川, 22 津和野, 23 大野, 24 鯖江, 25 沼田, 26 福知山,
 27 鳥山, 28 人吉, 29 下館

石高は明治初期, 人口は明治 5 年

による研究がある。それによれば城下町人口と藩石高の間には、おおむね正の相関関係があるとされている。
 では、代官所町の場合はどうであろうか。筆者は代官所町二三ヶ所について、人口と石高についての検討を試みた

表 4 城下町における町方人口と武家人口

| 城下町名(石高) | 町方人口(年次) | 武家人口(年次) |
|--------------------------|--------------|--------------|
| 大垣 ⁽¹⁾ (10万石) | 5,097人(天保14) | 5,819人(明和2) |
| 松代 ⁽²⁾ (10万石) | 2,319人(明治4) | 4,000強(明治4) |
| 松本 ⁽³⁾ (6万石) | 8,206人(享保10) | 6,072人(享保10) |

(1)角川地名大辞典「岐阜県」による。(2)日本歴史地名大系「長野県の地名」による。(3)豊田武「日本の封建都市」による。石高は明治初期。

表 5 代官所の役人数(慶応3年)

| | | | | | |
|---|-----|----|---|-----|----|
| 岩 | 鼻 | 16 | 市 | 川 | 13 |
| 笠 | 松 | 15 | 大 | 森 | 6 |
| 日 | 田 | 11 | 生 | 野 | 7 |
| 高 | 山 | 10 | 中 | 野 | 5 |
| 大 | 津 | 23 | 久 | 美 浜 | 8 |
| 信 | 楽 | 31 | 桑 | 折 | 8 |
| 蕪 | 山 | 17 | 石 | 和 | 11 |
| 甲 | 府 | 14 | 柴 | 崎 | 7 |
| 出 | 雲 崎 | 9 | | 塙 | 5 |
| 倉 | 敷 | 10 | 中 | 泉 | 9 |
| 水 | 原 | 11 | 五 | 条 | 9 |
| 小 | 名 浜 | 6 | 長 | 崎 | 15 |
| 真 | 岡 | 13 | 駿 | 府 | 10 |

人数は代官および属僚(手付・手代)の合計

〔江戸幕府代官史料一県令集覧〕による

(図3)。なお比較検討のため、二〇二〇万石以上の城下町を無作為に選び(9)、両者を比較した(図4)。

これによると、まず代官所町においては、正の比例関係は城下町の場合に比べて、稀薄であるといえる。一般的に城下町に比べ、石高の割に人口が少ない傾向を示している。例えば、支配石高七万九〇〇〇石の市川は明治一二年

の人口が六八一四人であるのに対し、ほぼ同様の城下町古河(八万石)が九三四三人(明治五年)、小田原(七万五〇〇〇石)が一万二六三九人である。また、一〇万石の笠松と同石高の藩の城下町についてみると、笠松が三五五〇人に対し、新発田が八九一九人、宇和島が一万五三九六人となっており、いずれもはるかに多い数となっている。

これは代官所町が同一石高の城下町と比べ、武家人口が極めて希少であることによるものと思われる。表4に示したように、城下町においては総人口に対する武家人口の割合が著しく大きく、一般の城下町で、大体町方人口とほぼ

同様、あるいは少ないかの程度であるという⁽¹⁰⁾。例えば、石高一〇万石の城下町大垣や松代においては、武家人口がそれぞれ五八一九人、四〇〇〇人強であるのに対し、同じ一〇万石の代官所町笠松の役人数は、わずかに一五人である。また六万石の城下町松本では武家人口が六〇七二人であるのに対し、六万三〇〇〇石の中泉、倉敷の役人数は各々九人、一〇人で極めて少なく(表5)、そこから形成される武家人口も当然希少となる。

このように代官所町においては、役人数がいずれも極めて少なく、まとまった武家人口を形成し得なかったと思われる。と同時にわずかな士族団では、消費人口としても期待できず、当然それに伴う商工業人口も少なくならざるを得なかったのではないだろうか。

以上のようなことが石高の割に人口が少ない傾向を示す原因ではないかと考えられる。また矢守が城下町の分析で指摘しているように⁽¹¹⁾、複数機能を有する長崎・駿府・甲府・大津などでは人口規模が大となっている。

六 明治以後の代官所町

代官所町は、近世期において地方行政の中心地として栄えた実績を踏まえ、明治初期には一九ヶ所に県庁が置かれ(表1参照)、引続き地方行政の中心地として発展する可能性を秘めていた。しかしながら、最終的に県庁所在地となつたのは、甲府・駿府(静岡)・大津・長崎の四都市にすぎない。

しかも、これらの都市名と県名についてみると、甲府は山梨県、大津は滋賀県、駿府は明治初期に静岡となり静岡県となつていて、わずかに長崎のみが県名と県庁所在地名が一致している。これはちょうど幕末の佐幕側諸藩の城下町が、県庁所在地とならなかつたり、県庁所在地となつても県名が異なつた場合が多いことと類似している。

一方、明治初期には県庁が置かれていながら、現在ほとんどその後で発展していない町もある。前述の四都市の他、現在市であるのは、真岡・中野・高山・五条・倉敷・日田であり、岩鼻・大森の場合はそれぞれ、高崎市・大田市の域に編入されているものの、それが主体となって市を形成しているわけではない。さらに明治初期に県庁が置かれていて、現在町にとどまるのが水原・石和・市川・葦山・笠松・久美浜・生野である。

これらのことは人口規模の点からも指摘される。前述の表1・表3にもみられるように、明治初期には県内有数の人口規模であったにもかかわらず、現在では著しく衰退、もしくは停滞しているものが多い。

このように明治初期に県庁が置かれていたものの、後に県庁所在地の地位を失い、著しく衰退、もしくは停滞している都市が多い。

それでは代官所町の多くが明治以後発展しなかったのはどのようなことによるのであろうか。

まず第一に考えられるのが政治的要因である。もし引続き県庁が置かれていたならば、その所在地としてその後で発展したのではないかということ。第二に主要交通路から隔離しているということである。とくに鉄道についてみると、例えば真岡を通る真岡線は、現在でも一日に上下合わせて二〇本余しか運行されていない路線である。また市川は身延線、五条は和歌山線、といずれも主要幹線ではない。また高山は高山本線、日田は久大本線であるものの、両者とも現在電化されておらず、久大本線については特急列車が運転されていない路線であり、やはり幹線とはいえない。

また葦山・中野・笠松のように国鉄が通っておらず、私鉄沿線の場合もある。葦山は伊豆箱根鉄道駿豆本線の沿線であり、現在の伊豆箱根鉄道は、豆相鉄道↓伊豆鉄道↓駿豆鉄道を経て現在に至っている。中野は現在長野電鉄の沿

線にあり、かつては河東鉄道と呼ばれていた。また笠松は名古屋鉄道の沿線である。この他、鉄道と主要道路からはほとんど隔離している大森の例もある。

七 代官所跡地の利用

代官所廃止後の土地利用の変化、そして現状という点につき整理すると、①小学校、②官庁関係等、③一般市街地に大別できる。

①については、真岡・水原・甲府・石和・久美浜・生野が挙げられ、水原は後に公民館となった。

②については桑折・岩鼻・中野・笠松・五条・大森などが挙げられる。桑折は郡役所となり、その建物が文化財として保存されている。岩鼻は県庁↓軍の火薬製造所↓社宅となっている。大森は県庁↓郡役所を経て現在石見銀山資料館となっている。また、中野は公民館に、笠松は県庁移転後、一般市街地となっている。五条については県庁移転後、史跡公園となっていて、市立民俗資料館には長屋門が現存している。

③については、市川・駿府・笠松・大津・日田が挙げられ、市川については門が現存している。また駿府は現在料亭に、大津は現在京阪電鉄浜大津駅付近の市街地である。日田・笠松には跡地を示す碑が立っている。

この他、葦山・高山のように代官所自体が文化財として保存されているものもある。このうち高山については、県庁↓支庁↓郡役所↓地方事務所を経て、四四年に文化財として保存され、現在に至っている。

八 おわりに

以上を要約すると、およそ次のようになる。

(1) 代官所の設置時期には約二〇〇年のひらきがあり、西日本および東海道に設置されたものの多くは比較的初期の段階に集中しているのに対し、東日本の多くが享保以降に設置されている。

(2) 笠松・中野・日田の職業構成から都市機能についてみると、三者に共通して商工業に従事するものの比率が高く、都市としての性格が強かったことがうかがわれる。

(3) 代官所町の景観の特色としては、城下町のような身分階層による居住地区分がみうけられない。また都市計画において、軍事的配慮は希薄であったと思われる。寺院が比較的多いのも共通した特徴である。

(4) 代官所町について、その人口と石高の相関関係について検討すると、城下町にみられるような正の相関関係はほとんどみられず、全体的に城下町に比較して、石高の割に人口規模が小さい傾向を示している。

(5) 代官所町の中には、明治初期に県庁が置かれていたものの、後に県庁所在地の地位を失い、著しく衰退、もしくは停滞している都市が多い。代官所町の多くが明治以後発展しなかった要因として、①政治的要因、②主要交通路からの隔離などの点が考えられる。

(6) 代官所町廃止後の跡地の利用についてみると、①小学校、②官庁関係等、③一般市街地の三つに大別できる。本稿では、代官所所在地について代官所町として規定し、論を進めてきたわけであるが、他の機能を兼ねその方が優位にある場合、あるいは町場を形成するに至らなかった場合（例えば葦山）もあって、代官所所在地のすべてを代官所町と呼ぶには問題があるろう。しかしながら、例えば日田や高山のように、代官所の存在がその町の歴史的發展に、多大な影響を与えたものも少なくなく、近世都市研究上重要な問題であると信ずるものである。

本稿では、天領の代官所在地についての極めて概略的な考察であったが、今後各々の都市について、さらに詳細な検討が必要であろう。とくに城下町との比較研究などによって、代官所町というカテゴリーをより明確にすることが今後の課題であろう。また雄藩の設けた代官所の場合についても検討していきたい。

本稿は、一九八三年度歴史地理学会第二六回大会において発表したものに加筆・訂正したものである。

末筆ながら、本稿を作成するにあたり、御指導・御鞭撻をいただいた駒沢大学文学部の中島義一・長野寛両先生、現地で御便宜・御教示をいただいた多くの方々、厚く御礼申し上げます。

注・参考文献

- (1) 村上直『天領』人物往来社、一九六五、村上直『江戸幕府の代官』新人物往来社、一九七〇、村上直・荒川秀俊『江戸幕府代官資料——県令集覧』吉川弘文館、一九七五、などが挙げられる。
- (2) 前掲(1)
- (3) 村上直「江戸幕府直轄領の地域的分布について」法政史学二五号、一九七三
- (4) 杉本勲『九州天領の研究』吉川弘文館、一九七六
- (5) 塚本学「役所と文人」歴史公論七月号、一九七八
- (6) 藤岡謙二郎「城下町の地理的性格に関する二・三の考察」『歴史地理学の諸問題』一九五二
- (7) 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』大明堂、一九七七
- (8) 西村陸男「藩領人口と城下町人口」歴史地理学一一号、一九八〇
- (9) 石高については、前掲(8) 四〜九頁から引用した。
- (10) 豊田武『日本の封建都市』一九五二、一五二頁